

名もなきものは名もなきままに

某市で講演をすませ、駅までの道を親しい人たちと共に歩いた。紅葉したつたに包まれた城壁が冬空に美しい。老婦人が私にいう。「先生が演壇で紹介された歌があまりにも心に響きましたので、もう覚えてしまいました。

身障の児のぬくもりが背に愛しく黄昏どきの陸橋を渡るでしたね。歩けない障害児を背負うて行く男先生の姿が夕雲と共に鮮やかに浮かびますね」。

教職出身のこの婦人は格別感に堪えないようだ。和歌山市の障害児訪問教育の浦野先生の歌である。人目をさけて生きる母子を説得し、やっと外出に成功、つとめて外気にふれさせて筋ジストロフィーの進行を遅らそうとしている。ある年末その子から年賀状の代筆を頼まれる。だれにと問うと、「先生にだけ」との答えに胸つかれ、先生は友達を作つてやろうと、「重障の子に賀状を」と新聞で呼びかけた。二千通も届けられる。愛と実践の巧まざる見事な教育道の表白といえよう。

もうひとり敏樹少年との永訣も悲痛である。

ほくのこと歌へといひし麻痺の子の逝きてはかなき歌詠まんとす

生きている証あかしを詠んでくれと頼まれていたのに、二十一歳で死んでいった。「これが君の歌だ」と、生きているうちになぜ詠んでやれなかったのか、自責に涙する先生である。

いのちはかなく逝ゆきたる麻痺の子が形見小さきラジオ鳴らしつつ行く

凍いてつきし訪問の道行くときも形見のラジオ我にささやく

浦野先生はこう結んでいる。「私は今も訪問の途次、敏樹君の形見の小型ラジオをたずさえて松風のわたる二里が浜の道を歩きながらそのラジオを鳴らすのです。敏樹君にしてあげられなかったことをこれから私は訪問の子にしてあげたい。敏樹君は私に心正しく生きる勇気を示してくれた少年でした」。

生徒も先生も高く生かされ合う世界。落ちこぼれのない教育。それがここに輝きわたっている。

(一九八一年十二月二十一日)